

## 震災から新研究実験棟・宿舎棟開所までの記録

### ・2011年3月11日14時46分

宮城県牡鹿半島沖でマグニチュード9.0の巨大地震が発生、東北地方太平洋沿岸域は広く震度6弱～6強の激しい揺れに見舞われた。国際沿岸海洋研究センターが立地する岩手県大槌町を襲った地震の震度については同町の新町に設置されていた地震計が津波により流出したため、不明である。

地震発生時に本センターにいた大竹二雄センター長はじめ教職員8名（教員2，事務職員2，技術職員3，非常勤職員1），学生・特任研究員4名，共同利用・共同研究者4名の合計16名は，大津波警報発令とともに全員が赤浜三丁目避難所に避難した。また，この他に学生3名，非常勤職員4名が大槌町，山田町，釜石市，宮古市などにいた。

### ・2011年3月11日15時16分頃

大槌町にかつてない巨大な津波（最大12.6 m：港湾空港技術研究所）が襲来し，本センターでも津波の高さは最大12.2 mに達し（佐竹健治本学地震研究所教授による），研究棟3階の窓付近まで水没した。

この津波により，本センターの研究棟，共同利用研究員宿舎，ポンプ棟などのコンクリート造りの建物はかろうじて倒壊は免れたものの，その他の車庫，船具倉庫，上屋などはいずれも全壊した。本センターの前にそびえていた防潮堤も崩壊し，その内側の敷地もかなりの部分が崩落し，30面あった屋外コンクリート水槽の半分以上が水面下に没した。本センター地先の係船場と蓬莱島（ひょうたん島）をつないでいた防潮堤も跡形もなく崩壊し，係船場も地震に伴う地盤沈下のために満潮時には冠水する状態となり使用不可能となった。「弥生」はじめ3隻あった調査船はいずれも流失した。大槌湾の水温・塩分，気温・湿度・風向・風速などを記録してきた海象・気象自動観測記録装置も流失し，装置を装着していた海象ブイは本センターの正門付近に打ち上げられていた。船具倉庫内の観測機器類はいずれも流失し，研究棟内の分析機器室や恒温実験室に設備されていたレーザーアブレーションICP質量分析装置やガスクロマトグラフ質量分析装置，画像解析システムをはじめとするすべての研究設備が全壊あるいは流失し，残ったものも海水とへドロにまみれて使用不可能な状態になった。2台の公用車とトラックを含め，本センター敷地内に駐車していた自動車はすべて流された。多くは後日，近隣の瓦礫の中から無残な姿で見えられたが，トラックなど一部の車両は所在不明となった。

### ・2011年3月11日夜

赤浜三丁目避難所に避難していた関係者は，赤浜地区で発生した火災を避けて吉里吉里地区にある特別養護老人ホーム「三陸園」に移動した。

タスマニアでの国際会議に出席中の佐藤克文准教授から，多くの大学院学生が同行していて無事であることの連絡が柏キャンパスの本所対策本部に入った。

### ・2011年3月12日

電話の通じるところまで避難してきた大学院学生から本所対策本部に安否に関する連絡が入り始めた。

### ・2011年3月13日

救援活動や本センター以外で被災した職員・学生の安否確認のために現地に残った大竹センター長を除き，三陸園に避難していた関係者の全員が自宅に向けて大槌町を後にすることができた。

### ・2011年3月14日

西田睦所長の所内外に向けたメッセージを本所ウェブサイトに掲載した。また22時10分には沿岸センターの教職員・学生と被災時に滞在中だった共同利用研究者全員の無事が確認できた。この情報は，直ちに所長から本学の災害対策本部（以下，本学対策本部）に報告したが，これによって本学の全員が無事であったことが最終的に確認された。

全員の無事が確認できたことをうけ，本所対策本部では，被災学生・教職員への支援（柏での当座の資金や住居，研究スペースなど）について具体的検討を開始し，本学対策本部にも住居などに関する支援を依頼した。

後日，沿岸センターの教員と学生および事務系職員はいったん柏に本拠を移すこととなったが，大学本部の支援により，柏ロッジや柏の葉ロッジの空き部屋の半年をめどとした使用が許され，とりあえず柏での生活が可能となった。また，研究所内での居室も，沿岸センター教員居室の活用や，関連する研究分野の研究室スペースの貸与によって確保された。本部事務局から被災学生向けリユースPCの貸し出しもあり，研究・勉学活動が少しずつ再開された。一方，現地で自宅をなくした職員の宿舎の調達にも，本学は協力した。

### ・2011年3月15日

12時45分に大槌の避難所にいた大竹センター長から，避難所へ医薬品等を至急送達してほしいとの連絡が本所対策本部に入った。本学対策本部に相談したところ，前田正史本部長から全面協力するとの即答があり，その日のうちに本学附属病院で医薬品を調達することができた。

### ・2011年3月16～18日

8時45分に医薬品等を積んだ本学の自動車を緊急車両として本郷から出発させた（第1次隊）。この車には現地案内者として，

福田秀樹助教が同乗した。車は本部職員2名が交代で運転して走り続け、その日の夕方には大槌に到着した。一方、医薬品以外の物品については、永田俊教授と沿岸センター大学院学生の天野洋典が届けることになり、柏で調達できたもののみを携えて20時に羽田空港を秋田に向かって発った（第2次隊）。彼らは翌17日の朝に残りの物品を秋田市で調達し、それらを積んだタクシー4台を連ねて雪が降る峠を越え、欠乏していた必需品を夕刻に大槌の避難所に届けた。

このような大槌支援、沿岸センター施設の状況確認等のための所員の派遣は、以後5月14日まで計11回に及んだ。とくに、第5次隊以降では、使える機器類・図書類・実験ノート・サンプルの回収、試薬類（とりわけ毒・劇物）・RIの詳しい被災状況把握と可能な範囲での回収、建物の安全性確認などが、重要な課題となった。

#### ・2011年3月20～23日

大竹センター長、道田豊教授が第3次隊として秋田空港より大槌町に向かった。途中、盛岡市内にて救援物資を調達したほか、市内に滞在していた大森弘光事務室係長と大学院生の天野氏、畑正好氏と合流した。大槌町に移動する際にはタクシーを利用したほか、一部のメンバーは同行していた岩手県庁の大越氏の好意により自家用車に同乗させていただいた。大槌高校と赤浜小学校にそれぞれに開設されていた避難所に救援物資を届けたほか、沿岸センター内外の調査、重要物の回収を行った。また間接的な情報しか得られていなかった東谷幸枝臨時用務員の安否も本人に会うことで確認できた。

#### ・2011年3月22日

西田所長より所内に見舞金の呼び掛けがあり、即座に多くの賛同が寄せられた。その志は4月に入って早々、大槌で被災したメンバーと千葉県浦安市での地盤液状化の被害を受けたメンバーに手渡された。

#### ・2011年3月23～24日

佐藤准教授、福田助教の2名からなる第4次隊が秋田空港よりタクシーを利用して大槌町に入った。大槌高校と赤浜小学校に開設されていた避難所に医薬品などを含む救援物資を届けたほか、沿岸センターの施設内に残された物品類の確認作業を行った。

#### ・2011年3月29～31日

第5次隊には、本所のメンバーである木暮一啓教授、福田助教、および川辺幸一専門職員に加えて、高橋健太（本部施設部施設企画課、事業企画・地域連携チーム）、川口克己（本部資産管理部管理課副課長、建物診断資格者）、および鷺山玲子（物性研究所低温液化室）が、沿岸センター建物の安全性点検や高圧ガスボンベ類のチェックのために加わった。今回の調査により、研究棟は当面、倒壊の恐れが無いことが確認された。

#### ・2011年3月30日

沿岸センターの教職員OB等を中心とする15名の発起人（代表は宮崎信之名誉教授）によって、沿岸センター災害支援基金が立ちあげられた。本所関係者や日本海洋学会員ほか関連コミュニティに広く呼び掛けがなされ、5月末までに320件を超える支援が寄せられた。

#### ・2011年3月30日～4月1日

第6次隊には、大竹センター長ほか大学院生を含む15名が参加し、教員室・学生室・センター長室の物品やデータ類の回収、計算機関係の被災状況の確認、高圧ガスボンベの回収、被災の象徴になるような物品の回収、事務室金庫の搜索、自宅に残された生活物品の回収などを行った。

#### ・2011年3月31日

盛田孝一技術職員が退職した。

#### ・2011年4月1日

4月1日に本所所長が西田教授から新野宏教授に交替し、新野所長が本所対策本部長となった。白井厚太郎助教が沿岸生態分野に着任し、平野昌明専門職員が技術職員に異動となった。大森事務室係長が岩手大学財務部財務管理課調達グループ主査に転出となった。また名古屋大学の依田憲准教授に地域連携分野の客員准教授を委嘱した（至2012年3月31日）。

#### ・2011年4月6～9日

第7次隊（大竹センター長ほか9名）では、瓦礫の片づけを行いながら回収を進め、学生・教員の物品回収、レンタル契約の電子計算機関連の被災状況の確認、薬品回収、未回収高圧ガスボンベ、CTD本体、データ処理PC、水中カメラ、ADCP、サイドスキャンソナー等を回収したほか、震災以来、閉ざされたままとなっていた共同利用研究員宿舎208号室のドア撤去、室内の点検などに尽力した。また、大槌に留まっているセンター職員や町への義援金（後述）の手渡しもなされた。

#### ・2011年4月8日

濱田純一総長が沿岸センターの被災状況を視察するとともに、東梅政昭大槌町副町長と会談し、本学として沿岸センターの復旧を図ることを約束した。

- ・2011年4月11日  
本学に救援・復興支援室（室長：前田正史理事・副学長）が設置され、同室に大槌復旧建設班（班長：新野所長）も設置された。
- ・2011年4月14～16日  
第8次隊（大竹センター長ほか6名）は、薬品類・廃液、RIおよびRI標準線源装備品の回収に成功し、柏への搬送を行った。
- ・2011年4月20日  
本所は災害対策本部を解散し、沿岸センター復興対策室および復興委員会を設置した。
- ・2011年5月2日  
大槌町の厚意により、城山の中央公民館の1室の提供を受け、本所はそこに沿岸センター復興準備室を設置した。新野所長と大竹センター長は西村幸夫副学長とともに東梅副町長と会談した。また、所長は県広域沿岸振興局長・県水産技術センター長にも沿岸センター復興への支援を要請した。
- ・2011年5月上旬頃  
「チャレンジャー2世」と「チャレンジャー3世」の2隻が相次いで大槌町内の瓦礫の中から見つかった。しかし破損状態がひどく使用不可能な状態であった。またこの時期に震災により失われた公用車の代わりとしてホンダ・アクティを購入した。当時は職員による機材の輸送の機会が多く、実用面を考慮して軽トラックの導入となった。
- ・2011年5月13日  
本学は遠野市に本部救援・復興支援室の遠野分室を、沿岸センター復興準備室内に救援・復興支援室大槌連絡所を設置し、前田副学長が東梅副町長および県広域沿岸振興局長と会談した。本所は、沿岸センター本館3階に復興準備室現地事務所を設置した。
- ・2011年5月15日  
キャンパス計画室の河谷史郎特任教授らの協力のもと、沿岸センター本館3階に電気と水道を引いた。
- ・2011年5月20日  
船具倉庫脇まで水道を引き、沿岸センター研究棟脇に仮設トイレを設置した。
- ・2011年5月20～31日  
研究棟と敷地内の瓦礫を撤去し、研究施設としての最低限の機能回復を行った。また、中央公民館内の沿岸センター復興準備室への電話回線引き込み工事とインターネット接続が完了した。これらにより大槌湾を中心とした三陸沿岸域の復興研究が開始できることになった。
- ・2011年6月  
江川雅子理事をはじめとする本部の協力により、東大基金に沿岸センター活動支援プロジェクトが立ち上がった。6月12～17日にはセンター研究棟の放射線管理区域を解除するための工事を行い、区域の清掃・汚染検査を実施した。これらの作業をもって、6月末に国際沿岸海洋研究センター放射線管理区域での放射同位元素の許可使用の廃止を届け出た。以降、立ち入り禁止であったRI実験室は機材倉庫などとして使われることとなった。またこの時期に不足していた輸送力を強化するため、軽トラックのスズキキャリィ、ダイハツハイゼットが購入された。
- ・2011年7月  
柏に勤務地を移動した教職員が大槌周辺に出張するための移動手段としてトヨタ・プリウス、トヨタ・ノアを購入した。それまでは柏キャンパスの公用車やレンタカーを利用していたが、これらの公用車が整備されたことで移動の利便性が大幅に向上した。これら職員はJR新花巻駅の無料駐車場を利用しながら交代でこれら2台の公用車を使用した。
- ・2011年8月  
22日に新調査船「グランメーユ」（フランス語で「大きな木槌」の意味）（FRP, 1.8t, 9.53 × 2.4 × 1.8 m, 100 kW法馬力）の進水式が大槌漁港で新野所長、大竹センター長、黒沢技術専門職員ほかの立ち会いのもとに行われた。また、外来研究員の追加募集とともに、共同利用研究が再開された。
- ・2011年9月  
岩手県による沿岸センター周辺の仮設防潮堤の建設が始まった（11月に完成）。沿岸センターでは、仮設ブイに装着した水温自動観測記録装置による水温の水深別記録を6カ月ぶりに再開した。また、「大槌湾や船越湾における藻場の被害状況と回復過程」に関する調査報告会を開催した。

**・2011年10月**

1日付で沿岸生態分野に田中潔准教授が着任、16日付で矢口明夫特任専門職員が着任した。また、例年5月に実施していた新領域創成科学研究科海洋環境臨海実習を岩手県水産技術センター（釜石市）の協力のもとで実施した。漁業者を対象とした「岩礁藻場域におけるアワビやウニなどの磯根資源の被害状況」に関する調査報告会を2回開催した。

**・2011年11月**

1日付で中国水産科学院の楊健教授に地域連携分野の客員教授を委嘱した（至2011年11月30日）。また6日付でフランス自然史博物館のEric Feunteun教授に地域連携分野の客員教授を委嘱した（至2011年11月18日）。

**・2011年12月**

大槌町の漁業者である小豆嶋勇吉氏より寄付を受けた船体に東大基金沿岸センター支援プロジェクトにより購入したエンジンを取り付け、2隻目の調査船「赤浜」（FRP, 1.2 t, 5.75×1.55×0.62 m, 30 kW 法馬力）を進水させることができた。また17日に大槌町中央公民館において、沿岸センターシンポジウム「三陸沿岸生態系に対する大津波の影響と回復過程に関する研究報告会」（大気海洋研究所と大槌町の共催）を開催した。

**・2012年1月**

大槌町と沿岸センター復興に関する打ち合わせが、また、本学キャンパス計画室とは沿岸センター建物再建のための打合せが行われた。文部科学省の海洋生態系研究開発拠点機能形成事業費補助金制度により、東北大学、東京大学大気海洋研究所、海洋研究開発機構の三機関が中心となって東北マリンサイエンス拠点形成事業（海洋生態系の調査研究）が開始された。

**・2012年2月**

本学の救援・復興支援室大槌復旧建設班の中に、連携活動部会（道田豊部会長）の設置が認められた。並行して、純水製造装置、電子天秤、実体顕微鏡、超音波洗浄器、冷蔵庫、冷凍庫などの研究施設やバンドン採水器、ニスキン採水器、スミスマッキンタイヤ採泥器、河川電磁流速計などの観測機器類を随時購入・整備した。さらに、コンクリート水槽3面を復旧し、FRP水槽2個、温水シャワーユニット、および倉庫を設置した。

**・2012年3月**

キャンパス計画室松田達特任助教作成のボリュームスタディ案に基づく沿岸センター建物再建案について打ち合わせた。同月、大槌町において、濱田総長、道田教授（連携活動部会部会長）、中井祐教授（連携活動部会副部会長）、碓川町長、阿部六平町会議長、高橋浩進副町長、岩手県職員1名が出席して、「東京大学と大槌町との震災復旧及び復興に向けた連携・協力に関する協定書」の調印式が行われた。2011年度の沿岸センターでの共同利用は、最終的に、採択した外来研究員53件のうち19件、研究集会4件のうち4件が実施された。また14日付でフランス自然史博物館のEric Feunteun教授に地域連携分野の客員教授を委嘱した（至2012年3月31日）。

**・2012年4月**

東北地方太平洋沖地震とそれに伴う大津波が沿岸の海洋生態系や生物資源に及ぼした影響、および攪乱を受けた生態系の二次遷移過程とそのメカニズムを解明することを目的として、1日に新たに「生物資源再生分野」が設置された。底生無脊椎動物から高度回遊性魚類を対象として三陸沿岸域における実証的研究、地域漁業復興の基礎を築くためフィールド研究を展開していくこととなった。またこの時期に本学北海道演習林より日産・セレナの譲渡を受け、センター周辺への移動の際に使われることとなった。

**・2012年5月**

1日付で柏勤務の松野康子事務補佐員が着任した。柏キャンパスで事務手続きを行う職員が着任したことにより、柏勤務の教職員は大槌の事務室を経由することなく種々の事務手続きができることとなり、大槌の事務室の負担も軽減された。また16日付で生物資源再生分野に河村知彦教授が最初の教員として着任し、同分野の活動が本格的に開始された。

**・2012年7月**

16日に中央公民館にてシンポジウム「大槌の復興から世界へひろがる海洋研究—東北マリンサイエンス拠点づくりに向けて—」が開催された。

**・2012年9月**

16日付で生物資源再生分野に広瀬雅人特任助教が着任した。

**・2012年10月**

1日付で沿岸生態分野に西部裕一郎特任准教授が着任した。17日に調査船「チャレンジャー」（FRP, 0.6 t, 5.89×1.77×0.7 m, 30 kW 法馬力）が進水した。釜石市より同市鈴子町の駐車場を借り受け、沿岸部でも公用車の受け渡しをすることが可能となった。この駐車場を利用することで積雪や凍結が厳しい時期に内陸部まで車を移動させる必要がなくなった。

- ・2012年11月  
5日に教職員が使用する公用車として日産・セレナを導入した。
- ・2012年12月  
1日付で生物資源再生分野に早川淳助教が着任した。3日に新センターの建設に向けた「国際沿岸海洋研究センター建設ワーキンググループ」(以下、建設WG)の第一回打ち合わせが開催された。16日付で生物資源再生分野に北川貴士准教授が着任した。
- ・2013年2月  
8日に第二回建設WG打ち合わせが開かれた。28日付で矢口特任専門職員が退職した。
- ・2013年3月  
8日に第三回建設WG打ち合わせが開かれた。31日付で柏勤務の松野事務補佐員が退職した。
- ・2013年4月  
1日付で事務室の川辺幸一専門職員が文学部財務・研究支援チーム係長へ異動となり、三上匠専門職員が着任した。また震災直後の4月に岩手大学財務部に戻られた大森弘光氏が係長として再び着任した。船舶部の平野技術職員が技術専門職員に昇任した。また名古屋大学の依田憲准教授に地域連携分野の客員准教授を委嘱した(至2014年3月31日)。19日に第四回建設WG打ち合わせが開かれた。16日付で船舶部に鈴木貴悟特任専門職員が着任した。
- ・2013年5月  
8日に第五回、30日に第六回建設WG打ち合わせが開かれた。13日付で小倉真美が柏勤務の事務補佐員として着任した。
- ・2013年6月  
14日に第七回、27日に第八回建設WG打ち合わせが開かれた。30日付で東谷臨時用務員が退職した。
- ・2013年7月  
1日付で倉本菜緒実臨時用務員が着任した。16日に第九回建設WG打ち合わせが開かれた。
- ・2013年8月  
1日に第十回建設WG打ち合わせが開かれた。2日に実践ワークショップ「大槌自然の宝ものを発信しよう！」が開催された。19日に第十一回、29日に第十二回建設WG打ち合わせが開かれた。
- ・2013年9月  
25日に教職員が公用車として使用するトヨタ・エスティマを導入した。このエスティマの購入を受けトヨタ・ノアは釜石市内の鈴子駐車場に置かれることとなった。
- ・2013年10月  
5日に大槌漁港にて、東北海洋生態系調査研究船「新青丸」の完成披露一般公開が開催された。12日には中央公民館にて大気海洋研究所公開講座「大槌の海は今!？」が開催された。
- ・2013年11月  
1日より研究棟三階の改修工事が開始された(至2014年2月15日)。12日に大槌漁港にて調査船「弥生」(FRP, 20 t, 17.6×4.3×2.0 m, 540 kW 法馬力)の竣工式が開催され、大槌稲荷神社による神事などが執り行われた。
- ・2014年1月  
1日付で沿岸保全分野の佐藤克文准教授が海洋生命科学部門行動生態計測分野教授に昇任し、沿岸保全分野教授も兼任することとなった。また情報・システム研究機構国立極地研究所の高橋晃周准教授に沿岸保全分野の客員准教授を委嘱した(至2015年3月31日)。9日よりプレハブ倉庫(上屋)の建設工事が開始された(至2014年3月27日)。
- ・2014年2月  
15日をもって研究棟三階の改修工事が完了した。船舶職員室、事務室、センター長室を除く、ほぼ全ての部屋と廊下の壁、床の塗装が塗りなおされたほか、一部の部屋の用途も大きく変わった。第四実験室は、実験室からオフィスとして生まれ変わり、共同利用者が滞在中にデスクワークを行う「共同利用研究室」となったほか、単なる機材置き場となっていたRI実験室ならびに共同利用研究室はそれぞれ「分析実験室」、「教員室」となった。旧第五実験室は「生物実験室」として引き続き利用されたほか、やはり機材置き場となっていた旧研究員室は重量のあるものでも収納可能なスチール製の保管棚を設置することで、収納効率を増し、「観測機材倉庫」との名称になった。これらの改修により、教員と共同利用者のデスクワークを行う場所が整備され、長期の滞在中のストレスが軽減されたほか、機材の保管・実験スペースの面でも大幅に研究環境が改善された。

**・2014年3月**

1日付で船舶部に岩間信彦学術支援職員が着任した。27日にプレハブ倉庫（上屋）が完成した。観測機材を輸送するトラックを格納できる本倉庫の完成により、夜間の降雨を気にすることなく、観測の前日のうちに観測機材をトラックに積み込こんでおくことが出来るようになり、観測当日の船舶部職員の負担が軽減された。31日付で船舶部の黒沢正隆技術専門職員が定年退職したが、4月1日より引き続き、特任専門職員として本センターの船舶の運航を補助することとなった。

**・2014年4月**

1日付で沿岸保全分野の大竹センター長が農学生命科学研究科教授に異動となり、生物資源再生分野の河村教授がセンター長となった。また沿岸保全分野に青山潤教授が着任し、船舶部の鈴木特任専門職員が技術職員へと異動した。

**・2014年7月**

JR新花巻駅の新幹線高架下に駐車場を借用することとなり、無料駐車場の縮小により困難となっていた車の受け渡しがスムーズとなった。30日から8月3日まで大槌町の商業施設シーサイドタウンマスト内の特設会場にてイベント「ちょっと魅せます海の最先端研究」を開催した。研究者の仕事に関する講演（白井助教）やサケの話題（野畑特任研究員）に加え、「顕微鏡を用いた貝殻の観察」、「煮干しの解剖」、「スナツブコケムシを探そう」など体験型のイベントを用意したところ、夏休み中の子供たちを中心に約60名の来場者があった。

**・2014年8月**

1日に夏休み自然体験講座「見つけよう！さんりく自然のたからもの」を開催した。5日には、大槌町が発行する広報誌「広報大槌」にて、「おおつち海の勉強室」の連載が開始された。この連載は第一回「赤浜の灯台」以降町内で好評を博したが、予算削減による広報誌縮小のため、2016年3月号の第二十回をもって終了した。すでに役場へ原稿を提出していた第21回分「赤浜の海鳥 カラスの話」は2016年5月の特別号で公表され、2017年5月の朝日新聞記事「カラス侵入禁止」に始まる新聞・テレビの取材合戦を呼び込むこととなった。

**・2014年9月**

震災後に建造された大槌港が母港となっていた東北海洋生態系調査船「新青丸」が初めて大槌港に接岸することとなり、大槌町、国立大学法人東京大学大気海洋研究所、海洋研究開発機構の共催により13日に新青丸入港記念講演会が、14日に一般公開が行われた。講演会では新野所長のあいさつのほか、河村センター長、東北マリンサイエンス拠点形成事業「プロジェグランメニュー」の木暮代表が講演を行った。

**・2015年1月**

26日よりプレハブ飼育棟の建設が開始される（至2015年3月31日）。

**・2015年3月**

28日にレンタルの冷凍コンテナを設置。震災以降、国際沿岸海洋研究センター関係者は柏キャンパスの大気海洋研究所二階の冷凍・冷蔵室を間借りする形となっていたが、収納されている研究試料の総量が膨らみ、室内の通路を塞ぐなどの問題となっていたため、これを解消する目的で設置される運びとなった。31日に0.5トンFRP循環式水槽3基、円形80L水槽2個を搭載した循環式調温水槽システム3基を備えたプレハブ飼育棟（90m<sup>2</sup>）が完成した。飼育区画以外に準備室（約20m<sup>2</sup>）を設けたことにより、これまで冬季の屋外で行っていたサケ親魚の解剖作業などが室内で実施できるようになった。また31日付で伊藤弘恵事務補佐員が退職した。

**・2015年4月**

1日付で事務室の大森係長が岩手大学工学部学部運営グループ主査として転出し、岩手大学財務部より佐藤光展係長が着任した。また名古屋大学の依田憲教授に地域連携分野の客員教授を委嘱した（至2016年3月31日）。

**・2015年7月**

18日に震災後初めてとなる一般公開「海を知ろう！海で遊ぼう！」が開催された。研究活動でお世話になる地域の方々と交流できる貴重な行事であるにもかかわらず、被災により実施することが出来ない状態が続いていたが、プレハブ飼育棟・船具倉庫の新設。三階部分の改修が完了したことで、再開する体制が整った。屋外水槽でのウミガメ観察や生き物にふれあう「タッチプール」、ちりめんじゃこの中に含まれる生き物観察を行う「ちりめんウォッチ」、「星砂ひろい」、調査船「弥生」や観測機器の展示、水槽での「魚の体力測定」といった出し物のほか、「魚の来た道を辿る—ウナギの進化—（青山教授）」、「三陸の海は今どうなっているのか？（河村教授）」と題された2題の講演が行われた。前日となる17日には大槌小学校の4年生と吉里吉里小学校の3、4年生の約100名を対象とした特別公開も行い、二日間で約300名が来場した。

**・2015年9月**

大槌町魚市場西側岸壁（旧大槌漁協前）にて岩手県、大槌町、国立研究開発法人海洋研究開発機構、国立大学法人東京大学大気海洋研究所、東北マリンサイエンス拠点形成事業、いわて海洋研究コンソーシアム、復興まちづくり大槌株式会社の共催により、26日には大槌町の高校生を対象とした新青丸の特別公開、27日には同一一般公開が行われ、当センターも西部特任准

教授、白井助教、広瀬特任助教がセンターの活動を紹介するパネルや標本の展示を行った。

・2015年10月

28日に新センターの設計業者が、ワダスタジオ一級建築士事務所から株式会社類設計室へと変更になり、変更後、第一回目の建設WG打ち合わせが開催された。

・2015年11月

12日、19日、26日に設計業者変更後、第二回目、第三回目、第四回目の建設WG打ち合わせが開かれた。

・2015年12月

3日、17日に設計業者変更後、第五回目、第六回目の建設WG打ち合わせが開かれた。

・2016年1月

14日、25日に設計業者変更後、第七回目、第八回目の建設WG打ち合わせが開かれた。

・2016年2月

1日付で沿岸保全分野の福田秀樹助教が同分野准教授へ昇任した。18日に設計業者変更後、第九回目の建設WG打ち合わせが開かれた。

・2016年3月

16日に設計業者変更後、第十回目の建設WG打ち合わせが開かれた。31日付で事務室の三上専門職員が工学系・情報理工学系等総務課東海チームに異動となった。

・2016年4月

1日付で事務室に菊地眞悟専門職員が着任した。また名古屋大学の依田憲教授に地域連携分野の客員教授を委嘱した（至2017年3月31日）。6日に設計業者変更後、第十一回目の建設WG打ち合わせが開かれた。28日より被災した係船場の復旧工事が開始された（至2017年3月31日）。

・2016年6月

20日に設計業者変更後、第十二回目の建設WG打ち合わせが開かれた。

・2016年7月

16日に一般公開「海を知ろう！海であそぼう！」が開催された。昨年と同様に屋外水槽でのウミガメや船具倉庫での底生生物の標本などの展示、生き物にふれあえるタッチプールが行われたほか、「海藻押し葉」や係船場では観測機器の展示の一環として水中カメラロボットの操作体験、「おおつちかるた」づくりといった前年とは異なる企画も実施した。また「岩手に戻ってくるサケの話（北川准教授）」、「三陸の海水はどのように流れていますか？（田中准教授）」の2題の講演が行われた。15日に行われた大槌学園・吉里吉里学園の3、4年生、約60名を対象とした特別公開を含め、2日間で約400名が来場した。

・2016年8月

8日に設計業者変更後、第十三回目の建設WG打ち合わせが開かれた。

・2016年9月

北海道演習林より譲渡された日産・セレナを廃車とした。センター敷地内で保管されセンター周辺で利用されていた日産・セレナの代わりとして、新花巻から大槌周辺への移動に利用されていた日産・セレナを充てることとし、新花巻駅高架下の駐車場よりセンター敷地内へ移動させた。また新センター完成までの期間を勘案した結果、新花巻駅周辺からの代わりの移動手段にリース車（トヨタ・ウィッシュ）を充てることとなった。

・2016年10月

18日の岩手日報こども新聞にて、月に一度、「さんりく 海の研究室」と題した特集が組まれることとなった。第一回目は「『海の東大』あるんだよ」と題されたセンターの紹介文が掲載され、以降センターの教員が輪番で記事を書くこととなった。

・2016年12月

21日より係船場に設置される新たなクレーンの設置工事が開始された（至2017年7月31日）。

・2017年3月

1日付で沿岸保全分野に峰岸有紀助教が着任した。31日付で黒沢特任専門職員と岩間みな子臨時用務員が退職した。また生物資源再生分野の広瀬雅人特任助教が退職し、4月1日に北里大学海洋学部の助教として赴任した。また被災した係船場の復旧工事が完了した。係船場内で弥生が旋回できるようにわずかながら場内が掘られた。

## ・2017年4月

1日付で大久洋美臨時用務員が着任した。また加戸隆介元北里大学教授に地域連携分野の客員教授を委嘱した（至2018年3月31日）。

## ・2017年6月

2日に設計業者変更後、第十四回目の建設WG打ち合わせが開かれた。

## ・2017年7月

16日に一般公開「海を知ろう！海であそぼう！」が開催され、屋外水槽でのウミガメや船具倉庫での底生生物の標本などの展示、調査船「弥生」や観測機器の展示が行われたほか、生き物にふれあえる「タッチプール」や「星砂ひろい」の企画、前年に好評だった水中カメラロボットの操作体験に加え本年はドローンの操縦体験も行われた。前々日となる14日に行われた大槌学園・吉里吉里学園の3,4年生、約60名を対象に行われた特別公開と合わせて約800名が来場した。本年度は赤浜自治会ほかによる「平成29年度ひょうたん島まつり」と同時開催となった。また31日に係船場で設置作業が進められていたクレーンが完成した。これにより、従前は漁協に依存していた荒天時の陸揚避難等の一部について独自に実施できる体制が整った。

正確な日付の記録がないが、この時期に震災直後から支援に入っていた東京都東久留米市在住の小日向明・恵美子夫妻から、センターに画家・大小島真木氏の作品を寄贈したい旨、申し出があった。

## ・2017年9月

2日に大槌港魚市場前岸壁にて岩手県、大槌町、国立研究開発法人海洋研究開発機構、国立大学法人東京大学大気海洋研究所、東北マリンサイエンス拠点形成事業、いわて海洋研究コンソーシアム、復興まちづくり大槌株式会社の共催により行われる新青丸の一般公開にて、当センターも生きたウミガメ、生物標本の展示などを行う予定であったが台風接近により新青丸が接岸できないため中止となった。15日に大小島氏・小日向夫妻が建設中の新棟を訪問し、制作場所等を見学した。この際、現場監督の銭高組・荒木所長が同行し、各部屋の説明等を行った。30日付で大久臨時用務員が退職した。

## ・2017年10月

1日付で西部特任准教授が当所の海洋生態系部門浮遊生物分野の准教授として異動となった。また18日の大気海洋研究所教授会にて西部准教授が沿岸生態分野准教授を兼任することが承認された。

## ・2017年11月

1日付で八幡早苗臨時用務員が着任した。

## ・2018年1月

1日付で岡谷さちえ事務補佐員、及川さなえ事務補佐員が着任した。

## ・2018年2月

1日付で沿岸保全分野に野畑重教特任助教が、生物資源再生分野に大土直哉特任助教が着任した。新しい研究実験棟の建設作業が進む中、旧研究実験棟からの什器などの移設作業が13日～21日に行われた。28日に銭高組より完成した研究実験棟・宿舎棟が引き渡された。同日より岩手県、大槌町の許可のもと特定施設にあたる実験室の排水設備の設置が可能となった。また3月末に閉鎖されることとなっていた遠野分室より公用車のトヨタ・プリウス、マツダ・デミオが移管された。

## ・2018年3月

3日に特定施設にあたる実験室2の流し台の設置が完了し、特定有害物質を除く薬品類を用いた研究活動が再開された。11日に東京都東久留米市で、東久留米市アートプロジェクト共催による「忘れまいその日コンサート」が開催され、会場において大小島氏の制作費用を募った。トークセッションでは、大小島氏とともに、センターの道田教授および青山教授が登壇した。15日に旧実験棟敷地内にあった冷凍試料の新研究実験棟内の低温室（冷凍）への移設が完了し、27日にレンタルしていた冷凍コンテナを返却した。30日には実験室1の整備も完了し移設前の旧研究実験棟と同程度の研究活動・共同利用研究の受け入れが可能となった。

## ・2018年4月

1日より震災復興工事が進む一方、過疎化・高齢化の加速する被災地の状況を考慮し、これまでの基礎海洋科学研究機関としての役割に加え、地域振興の一助となることを目的として、文理融合型地域振興研究教育プロジェクト「海と希望の学校in三陸」を開始した。東京大学社会科学研究所との協働による本プロジェクトは、三陸各湾の水産資源生物に関する研究を推進し、得られた自然科学的特性と地域社会の人文科学的な関連を明らかにすることにより、地域住民とともに地先の海の持つ可能性とそれを生かしたローカルアイデンティティの再構築を通じて、地域に希望を育むことのできる次世代の人材育成を育成することを目的とする。このプロジェクトのため「沿岸海洋社会学分野」が新設された。また同日付で佐藤光展事務室係長が岩手大学農学部運営グループ主査（副事務長）へ転出したほか、佐藤克憲事務室係長が着任し、東北歴史博物館の小谷竜介学芸員に地域連携分野の客員准教授を委嘱した。16日に大小島氏・小日向夫妻がセンターに到着し、天井画の制作を開始

した。22日には、主に赤浜地区を対象に特別公開を行い、制作中の天井画とともに、センター内部も一部公開した。大槌・三陸の海に所縁のある生き物を中心に、大小様々な生物が躍動する天井画が制作され、29日に終了した。

・2018年5月

31日付で小倉事務補佐員が退職した。